

フランスの初等学校における文法教育：
Entraînement à la Grammaire (1981) の概要とその分析
－森有正の「文法」に導かれて－

Study on Entraînement à la Grammaire, Cours Moyen 1 (1981)

藤原 雅 憲

Masanori FUJIWARA

1. はじめに

Mori (1972) は序文の中で次のように述べている。

日本語では文法 (*grammaire*) は確かに、この言葉を本当に知ろうとするのに不可欠で、貴重な情報を提供してくれます。しかし、文法を使って文を書こうというように用いることは、その性質上難しいです。学校で用いる”規範”文法というものはありますが、それは、日本語の表現の中で認められる規則性を整理したものにはすぎません。一方フランス語の場合に見られるように、いわゆる文法というもの、言語の構文の用い方に資するものなのです。(Mori 1972: 1)

日本語文法と比較して、フランス語の文法は構文の用い方に資するものだという見方が森の発言に多く見られる。次は1968年10月頃のものである。

その(筆者注：フランス語の)文法の授業は、単に規則を教えるのではなく、教える事実や規則を無数の実例に照らして説明し、たくさんの応用問題をやらせて、その知識を確実にするのである。そ

ういう意味の文法書はたくさんあり、一つの文法書には必ず練習問題の本が別についているのである。(森1978: 128)

このような森の見方を支持するのが清水(1959)である。「フランスの初等教育に詳しい友人の話」(p.91)として、「フランスでは、既に小学校で文章の文法的分析を教えている。私の聞き違いでないなら、この文法的分析は「フランス語」という科目の主要な内容になっている」(同ページ)と伝えている。

1970年前後に森が語ったフランスの国語教育が、約50年後の今日においても受け継がれていることを渡邊(2020)が明らかにしている。フランスの小学校や中学校の国語授業を観察して次のように述べている。

「論理的であること」は、小学校では主として「文法」の授業を通して学ばれる。文章における時制の規則や性と数の一致の規則、動詞の活用の規則は、言葉の運用の「原理」として正しい「綴り」に反映される。小学校における「論理性」の育成は、こうしたある原理・原則にもとづいたシステムとしての言語の「一貫性」を通して育成される。日常的に行わ

れる訓練では、紙に書いた一つの文を単語ごとにはさみで切り離し、それぞれの語の文法的機能をその名称とともに学ぶ。「分析する」とは、複雑な現象や概念を、それを構成している最小の要素に分けて説明することを意味するが、フランスの小学校の文法教育で用いられている方法はまさに「分析」の手続きを体現している。次に一度ばらばらにした語を再び文章にして、今度はある構造の中で各部分がどのような役割を果たすのかを確認する。分析の後に統合して、全体構造の中に部分を「位置づける」作業を行うのである。このとき基本文型の学習も行う。一通り文法の規則を覚えた小学校の高学年では、ある文がなぜこれで文法的に正しいのか理由を考えさせる課題に取り組む。(pp.102-103)

また、山崎(2022)でも言語資本としての国語の重要性を述べている。これは「エリートたちが所有するフランス語の運用能力の卓越性」(p.12)に焦点を当てた研究で、「エリート形成でのフランス語の位置づけは二十一世紀現在でも変わらず重要なものである」(p.111)ことを明らかにしている。綿密な聞き取り調査に基づいた同研究は次のような被調査者の声を取り上げている。被調査者はブルターニュ地方在住の母親。ハンディキャップ教育に関する視学官を務めている。

私は考えるわ。私たちが全く苦にならない簡単な正書法を身につけるためにどうすればいいか。私たちは毎日ディクテをしたわ。……それは生徒を鍛えていた。私たちは彼らの想像力を養わなければならなかった。そして私は、想像力を養うには、言葉をじょうずに使いこなさなければならず、想像力は言葉からも生まれてくると思う。……間違っって書かれた単

語は出来の悪い想像力だと私は思う。
(p.203)

森(1972)に導かれ、現代フランスの国語教育の状況に触れて、国語教科書の内容を詳しく知る必要を感じた。幸い、金城学院大学図書館に所蔵されている小学校5年生向けの文法教科書を手にすることができた。*Entraînement à la Grammaire*と題された、128ページからなる冊子だった。1981年の出版物であるという限定を承知で以下では、その概要を日本語訳で示し、簡単な分析を行った。

2. *Entraînement à la Grammaire*の概要

書名：*Entraînement à la Grammaire, CMI* (筆者注：Cours Moyen 1の略。小5年生)

著者：Pierre Roux (Inspecteur professeur à l'Ecole Normale de Lyon)

発行所：Hachette (79 bd St Germain 75006 Paris)

発行年：1981年

所蔵：金城学院大学図書館 (登録番号：0171185)

内容：全6章、35節+動詞の活用

I. Les hommes et leurs langues (人とその言語)

【1節】 Les hommes et leurs langues (人間とそのことば)

○ある言語は、それを話す人々すべてに共通しており、それを母語と言います。フランス語は、フランス人、スイスやベルギー、アメリカ、カナダの一部住民の母語です。二か国語併用の人々もいます。

中学生になったら、1つないし2つの外国語を習うこととなりますが、皆さんが会おう人々の中には、3つも4つも外国語を話す人もいます。それがすごいと思えるのは、多くの学習時間をかけた結果だからです。逆に、

少ないとも思えるのは、世界には3000以上の言語があるからです。

○練習

- (1) 英語はどの国で話されていますか。スペイン語はどうですか。
- (2) その国の言葉を知らない人に、目の前の水が飲めないことを、どうやって理解させますか。そのプランを示しなさい。

【2節】 Comment fonctionne la langue française (フランス語の働き)

○人間は数字を発明しました。1から10までの数字で無限の数を書くことができます。同様に言語音も限られていて、それを組み合わせて語を作ります。フランス語では36の音を用いて語を作っていますが、その数は20万個を超えています。音の並べ方によって語は異なります。[sale] と [lase] のように。また26の文字があり、組み合わせによって語が異なります。cigare と cirage のように。語は組み合わせさせて文 (phrases) を作ります。フランス語を理解する者はみんな、同じ意味を持つ語を規則に従って配列します。それがフランス語を話せるということです。

○練習

- (1) p という文字だけでは何も表しません。次の語の中で、下線部の文字をpに置き換えなさい。どんな変化が生じましたか。

bain~bu~boire~boule~bois~dont~dire~douce

- (2) 次の語の中の文字を1つ消しなさい。新しくできた語は何ですか。

ruse~plante~vente~couru~point~brosse~chant~base

【3節】 Langue orale, langue écrite (話しことばと書きことば)

○話しことばは音声を用いて語や文を作ります。声はその役目を務めます。音声を受け取るのは耳です。

○書きことばは文字を用いて語や文を作ります。手はその役目を務めます。文字を受け取るのは目です。

○練習

- (1) この語はどう発音するのかという疑問を解決するのは話しことばですか、書きことばですか。
- (2) 黙字 (lettre muette) とは何ですか。
- (3) 書かれたものでは、各文は大文字で始まり、句点 (ポワン) で終わります。連続した文を音読する際にはどうやって区切りをつけますか。
- (4) 目の不自由な人は点字を用います。どういう仕組みか説明しなさい。
- (5) モールス信号とは何ですか。どうやって使いますか。

【4節】 La langue en situation: situations d'oral (実際のことば: 話しことば)

○次の会話を観察してください。どんなことがわかりますか。

A : Un poisson gros comme ça! (こんなに大きい魚なんだ!)

B : Sans blagues, aussi gros que ça? (マジで? このくらいでしょ)

- (1) 一人が話している間もう一人は聞いています。
 - (2) ときどき両者が同時に話すことがあります。
 - (3) ときどき話を切ったりします。
 - (4) 会話の話題が次から次へ移っていきます。
 - (5) ジェスチャーを交えることで、うまく説明しようとしたり、相手にわかってもらおうとしたり、賛成か反対かを伝えたりします。
 - (6) 相手が反応します。
- 話し手は次のように行動しています。
- (7) 文を終わらせません。
 - (8) 語を探すことがあります。

- (9) 言い直したり、ためらったり、間を取ったりしています。
- (10) 口調を早めたり、音調を変えたりしています。
- (11) 注意を惹く言葉を使っています。dis donc, au fait, tu vois, など。

○話す場面は次のようです。

- (12) 路上でのやりとり、電話会話、戯曲、教室内のおしゃべり、先生と授業。

○練習

- (13) 今までに学んだ会話場面と、政治家が聴衆に向かって行う演説とどう違いますか。

【5節】 La langue en situation: situations d'écrit (実際のことば：書きことば)

○書く時には紙の前で一人です。

- (1) 読み手のことは当然ながら何も知りません。
- (2) 書く前にはよく考え、「下書き」を作ることができます。
- (3) 書いている途中で満足できない時には書き直しができます。

○書き手

- (4) 読み手の反応を知るすべがありません。
- (5) 読み手の理解を助けることはできません (ジェスチャーを用いたり、口出しすることなどは不可能)。

○書く場面

- (6) 手紙を書く
- (7) 記者が読者に事件を伝える
- (8) 器具の使用説明書を書く
- (9) ポスターやビラを書く
- (10) 調査のために質問票を作成する
- (11) 君たちのように昨日あったこと、したことを作文にまとめる

○練習

- (14) 誰に向けて? 「ポスター」, 「ビラ」, 「店の看板」

- (15) 勉強した後で、「古文書」と「議事録」について説明しなさい。

- (16) おいしいお菓子のレシピを知りたいときにはどうしますか。

II. La phrase (文)

【6節】 Phrases et non-phrases (文と非文)

○文とは何でしょうか。

Moi être content beaucoup.

このように言えば、フランス語をよく知らない人だと思うでしょう。そして次のように言いなさいと忠告するでしょう。

Je suis très content.

語を並べるだけでは当然、文にはなりません。文は構文の規則に従っていなければなりません。本書でそのいくつかを学んでください。話しことばでは、いつも完全な文を使っているわけではありません。「駅はどこか」と聞かれ、「駅? まっすぐ行って左」と答えるのが普通です。一方、書きことばではずっと厳しいです。規則に沿った完全な文を書かなければなりません。以下は非文の種類です。

- (1) 不完全な文 (例) Le petit chien de la dame qui habite en face de chez moi (家の向かいに住むご婦人の子犬)
- (2) 意味はなしているものの、語が並んだだけ (例) Lui vouloir partir (彼、欲する、でかける)
- (3) 構文的には正しいが、意味をなさない (例) Les nuages embaumé cuisaient le fil de terre. (香しい雲が土の糸を焼く)
- (4) 構文的には正しいが、意味が馬鹿げている (例) En l'an 2000, les gens marchaient à quatre pattes. (2000年には人々は四つ足で歩いていました)

○練習

- (5) 次は幼児の文です。完全な形に直しなさい。

- a. *Moi pas vouloir manger soupe.*
- b. *Maman jamais acheter bonbons.*
- (6) 次の電報文を完全な文に直しなさい。
- b. *Sommes bien arrivés – Voyage excellent* (2文)
- c. *Pierre léger accident – Voiture immobilisée* (2文)

(7) 次の文章の中に句点（ポワン）を打ったり、大文字を用いたりして文に分けなさい。

dans chaque case on écoutait les transistors une vingtaine d'heures avant la tourmente des mises en garde avaient été diffusées elles s'étaient multipliées au fur et à mesure que le danger approchait（それぞれの時間帯にラジオを聞いていた。嵐の20時間前に警報が流された。危険が迫るにつれて警報が繰り返された）

【7節】La phrase déclarative（平叙文）

○平叙文はもっともよく使われる典型的なものです。何かを言い（*dire*）、宣言し（*déclarer*）、主張する（*affirmer*）文です。すでにおわかりのように、文章は句点（ポワン）で文に切り離されます。文は大文字で始まります。また、文は同じ長さではないことにも気づいていることと思います。たとえば、

Il dort.

Si l'on ne fait pas attention au froid, on peut s'enrhumer sans s'en rendre compte.（寒さに気を付けなければ知らないうちに風邪をひきます）

という2つの文は長さが相当違います。

○人が書いたり話したりする文の数は無限です。すべての文が共通に持っている事柄を探し出すのはおもしろいことです。その事柄が文と非文を区別するのです。では、それを発見するために、もっとも小さい平叙文から始めてみましょう。

Il dort.（彼は眠る）、*Elle marche.*（彼女は歩く）、*Ils nagent*（彼らは泳ぐ）

上の例は私たちが出会う最小の文です。これらは2つの要素だけで成り立っています。各要素は1語だけです。次の例を見てください。

Il dort.（彼が眠る）

Pierre dort.

Le garçon dort.

Le petit garçon qui fréquente la même école que moi dort.（私と同じ学校へ通う少年）

Il dort.

Il mange un bonbon.

Il écrit une lettre à ses correspondants.

「*il*」を他のものに置き換えて「*dort*」と結びつけると新しい文が得られます。また、「*dort*」を他のものに置き換えても新しい文が得られます。

- (1) 以上のことから、平叙文には「*il*」のグループと「*dort*」のグループの2つが必須であることがわかります。「*il*」のグループを主語名詞グループ（*le groupe du nom sujet*）と呼びます。GNSと略します。
- (2) 「*dort*」のグループは動詞グループ（*groupe du verbe*または*groupe verbal*）と呼びます。GVと略します。
- (3) 2つのグループのうち1つ欠ければ平叙文とはなりません。
- (4) 2つのグループを強く結びつけている絆を主語機能（*fonction sujet*）と呼びます。詳しいことは後の課で学びましょう。
- (5) 文に付加可能な他のすべての要素は、文を詳細にする点で興味を引くものと言えます。ただ、これらの要素は文の成立には不可欠ではありません。そのため、これらを任意グループと呼びます。詳しくは後の課で。

○練習

- (6) 次の文を書き写しなさい。その後、「*IL*、*ELLE*、*ILS*、*ELLES*」に置き換えられるグループを四角で囲いなさい。最後に、得

られた文を書きなさい。

a. Les pommes que j'ai achetées sont bien mûres.

b. Papa et maman sont sortis.

(7) 正しい文に直しなさい。

c. Elle ne mangent pas à la cantine.

d. On est heureuse d'être en vacances.

(8) 次の文に、場所や日時、理由などの情報を付け加えなさい。

e. On écoutait les transistors.

f. Josiane n'aime pas la pluie.

【8節】 Le premier groupe obligatoire: le GN sujet (必須の主要語群：主語名詞)

○主語名詞の長さはさまざまです。

(例) Elle marche. Le petit bébé qui a juste une marche.

○主語名詞は数(単数・複数)の上から動詞の形を変えます。主語名詞が複数なら動詞も複数形になります。

○どうやって見つけるのでしょうか。方法が3つあります。

方法1：長さにかかわらず、「il, elle, ils, elles」に置き換えられます。

(例) Les explorateurs qui reviennent d'Afrique racontent leur expedition.

→→→ils racontent leur expedition

方法2：名詞が複数なら単数に変えてみましょう。またはその逆。動詞の形が変われば、それが主語です。

(例) 「Dans le ciel, au-dessus de l'aéroport, l'avion fait un bruit assourdissant」という文で、「fait」を「font」に変えるにはどうすればいいですか。

方法3：構文「c'est.....qui(またはce sont.....qui)」を使って主語名詞を際立たせます。

(例) La radio a annoncé la nouvelle. → C'est la radio qui a annoncé la nouvelle.

○他の主語グループ

「je」や「tu」も主語名詞です。「il, elle, ils,

elles」とは異なり、他の名詞と置き換えができません。書く人、話す人は自分について言う時に「je」を使います。相手を指す時には「tu」を用います。主語名詞の「je, tu(丁寧なvous)」はいつも単独の語で、「C'est.....qui」構文でも使われます。

○「nous」や「vous」も主語グループです。

「nous」は「je + 他のだれか」を表します。

(例) Toi et moi = nous, Tout le group et moi = nous

「nous」にはいつも「je」が含まれ、「vous」には決して「je」は含まれません。

○「nous」や「vous」には主語以外の役割もあります。「Il nous parle.」「Il vous parle.」のようにも使われます。「nous」や「vous」が主語名詞かどうか判断するためには、それらを置き換えると動詞の形を変えるかどうかを確かめてください。

○話しことばにおける主語名詞：主語名詞を強める傾向があります。

(例) Moi, mon papa il m'a expliqué comment ça marche.

○練習

(1) 完全な文になるような主語名詞を補いなさい。

a.vont au cinema une fois par semaine.

b.font un bruit insupportable.

(2) 主語名詞を「c'est.....qui」構文で際立たせなさい。

c. La neige rend les routes glissantes.

d. Victor Hugo a écrit Les Misérables.

【9節】 Les phrases impératives (1) (命令文(1))

タイトルは「命令文(1)」である。最初にV.ユゴーの詩「Toute la lyre」や鳥の串焼きのレシピ、ポスター掲載文を紹介しています。

○命令文は他人に向けて促したり依頼したりする文です。

○命令文には主語名詞がありません。

○3つの人称を含む命令文では動詞はいつも命令法です。単数の2人称では「va, dis, chante, cours」などの形になります。複数の一人称では「rions, dansons, aimons」などの形が使われます。複数の二人称では「commencez, suivez, dites, faites」などの形になります。

○練習

(1) 下のa~cで命令文を作り、声に出して言いなさい。次いでノートに書きなさい。

- a. 「faire attention」するように言ってください。
- b. 「venir près de vous」するように命じてください。
- c. 「fumer dans la pièce」することを禁じてください。

(2) 次のことを頼みたいときにどう言えばいいですか。

d. d'éteindre leur cigarette

e. d'entrer sans frapper

【10節】 Les phrases impératives (2) (命令文(2))

○命令文には肯定も否定もあります。

(例) Prends ton manteau. Ne prends pas ta veste.

○命令法と不定法

(例) Faites revenir dans la poêle vos coquillettes.

Faire revenir dans la poêle les coquillettes.

1番目は命令形を使っていますが、2番目では動詞が不定法になっています。綴り字の違いに留意してください。

命令法と不定法を見分けるのに2つの方法があります。

(1) 否定の形が異なります。

(例) <N'ajoutez pas> と <Ne pas ajouter>

(2) 補語の代名詞を含む場合、その構成法が異なります。

(例) <Coupez-le> と <Le couper>

○練習

(2) 次のレシピを命令法に変えなさい。

Peler et couper en petits cubes les courgettes et les aubergines fraîches et fermes…….

(3) 次は話しことばの文です。書きことばに直しなさい。

a. T'approche pas du feu.

b. Parle pas la bouche pleine.

【11節】 Les phrases interrogatives (1) (疑問文(1))
タイトルは「疑問文(1)」である。冒頭でGavino Leddaの「Padre Padrone」という小説の一部を載せている。「イタリアに従軍した若い兵士が生まれ故郷のサルデーニュに帰りたがっている。その訳を大尉が聞いている」と状況を説明した後、二人の会話が続いている。次いで、健康診断の調査項目が掲載されている。その一部は次のようである。

a. La mère est-elle toujours en bonne santé?

b. L'enfant a-t-il des frères et sœurs?

c. Quel est leur état de santé?

d. A-t-il subi une operation chirurgicale?

○知らない事柄を相手に提供してほしい時には質問します。先ほどの小説では話しことばを扱いました。健康診断では書きことばでした。では、疑問文の作り方を見てみましょう。

a. Pierre aime les pommes.

→Pierre aime-t-il les pommes?

→Est-ce-que Pierre aime les pommes?

b. Nous viendrons demain.

→Viendrons-nous demain?

→Est-ce-que nous viendrons demain?

c. Je dois rester

→Dois-je rester?

→Est-ce-que je dois rester?

○主語名詞としての「je」はいつも倒置が可能というわけではありません。「Vais-je?」「Suis-je?」は耳にしますが、「Pars-je?」「Cours-je?」「Pensé-je? (筆者注: Pense-je?)」はあまり使われません。

○話しことばでは、書きことばと同じような疑問文を用いてもいいし、文末に上昇イントネーションを使うだけでも疑問文が作れます。

(例) Qu'y a-t-il?

Et pourquoi tu veux retourner parmi tes
troupeaux?

○練習

(1) 次の文を疑問文に変えなさい。

Vous êtes blessé. b. Ils sont contents.

(2) 次は話しことばの疑問文です。書きことばに直しなさい。

Il fait quell temps ce matin? b. Vous les avez
achetées où vos bottes?

(3) 次は答えの文です。質問はどんな文です
か。

Je l'ai vu à trois heures. b. Non, il ne m'a pas
parlé.

【12節】Les phrases interrogatives (2) (疑問文(2))
「疑問文(2)」という見出しです。

○疑問文は、「はい」「いいえ」で答えられる
ものと、そうではないものに分けられます。
前者は疑問詞を含みません。後者はさまざま
な疑問詞が文頭に現れます。これらの疑問詞
は前置詞と結びつくことがあり、「à qui, de
qui, pour qui, avec qui」のようになります。

○次は疑問詞の例です。

Qui, Que, Quoi, Quel/Quelle/Quels/Quelles,
Lequel/Laquelle/Lesquels/Lesquelles, Comment,
Combien, Où, Quand, Pourquoi

これらが前置詞「A, De, Par, Pour, Sur, Avec」
と結びついた例を作りなさい。

○練習

(1) 次は話しことばの疑問文です。書きことばに直しなさい。

a. Il est où ton livre?

b. Tu les as payées combine tes bottes?

(2) 「où」で始まる疑問文を5つ想像して
みなさい。その答えも出しなさい。答えに
共通することは何ですか。

【13節】La phrase: forme affirmative et forme
négative (肯定文と否定文)

肯定形と否定形を提示している。「文：肯定
形と否定形」という見出しである。

○これまで3つの文のタイプを学びました。
平叙文, 命令文, 疑問文です。3つのタイプ
の文には肯定と否定があります。

(例)

a. Les gens rentrent chez eux.

Les gens ne rentrent pas chez eux.

b. Pressez-vous!

Ne vous pressez pas!

c. Avez-vous vu le feu rouge?

N'avez-vous pas vu le feu rouge?

「ne……pas」を含まない文は肯定形で、含む
文は否定形です。従って文は必然的に肯定形
か否定形です。

○他の否定文

二人が飛行機に乗っています。C Aが来て、
「怖くないですか」と聞きました。一人は「Je
n'ai jamais peur en avion.」と答え、もう一人
は「Je n'ai plus peur en avion.」と答えました。
意味はどう違いますか。

○話しことばでは、倒置による疑問文を用い
ることは多くありません。「N'avez-vous pas du
feu s'il vous plaît?」というよりは「Vous n'avez
pas du feu s'il vous plaît?」のほうがいいです
し、「N'as-tu pas vu mes lunettes?」よりは「Tu
n'as pas vu mes lunettes?」が多く用いられてい
ます。

○練習

(1) 話しことばでは否定の「ne」を使わな
いことがあります。書きことばでは「ne」
は必須です。次は話しことばです。書き
言葉に直しなさい。

a. Il dit qu'il a pas le temps; ça m'étonne pas, il a
jamais le temps.

b. On a plus de bonbons; on a plus pensé d'en
acheter.

(2) 次の文を否定形にしなさい。どんな変化

がありましたか。

c. J'ai acheté un gâteau.

d. J'ai acheté de la confiture.

Ⅲ. Le groupe nominal (名詞群)

【14節】 Le nom et le groupe nominal (名詞と名詞グループ)

「名詞と名詞グループ」と題されている。

○名詞とは何か

語の総体を類別することができます。同じ働きを持つ語を同じクラスに整理することです。例えば、「manger」「dormir」「courir」は同じクラス(動詞クラス)に属します。なぜなら、これらはすべて「je, tu, il,」などの語と作用しあうことができるからです。

名詞というクラスは文の必須グループの中で、限定詞(冠詞等)なしには用いられない語のすべてを包含しています。下のようなものはフランス語としては受け入れられません。

Soleil s'est levé ce matin. Cerises sont mûres.

名詞に先立つ語を限定詞と言います。その一覧表はもう少し後で載せます。皆さんは名詞の前に「le, un, la, une」が付くことをご存じです。そこで、

限定詞+名詞=名詞グループ、とします。

○名詞が表すもの

(1) 「見ること、触ることができる」具体物：
水、蛇、箱、子供……

(2) 「私たちの頭の中に存在する」抽象物：
平等、優しさ、意地悪さ……

(3) 動作：停止、進行、転落、選択……

○固有名詞は名詞グループとして機能します。固有名詞は限定詞がなくても成立します。

「La Seine, Les Alpes, Le Havre」などは限定詞を持っていますが、それはいわば固定していると考えられます。ですから、「La Seine」を「Les Seines」「Le Seine」ということができません。固有名詞と区別するために、「la

montagne, la ville」のような名詞を普通名詞と呼びましょう。

○練習

(3) 次の語の中で名詞はどれでしょうか。答えを導く手段が2つあります。一つ目は、これまでに限定詞(un, le, une, la)が付いていたかどうか思い出してみると、二つ目は辞書を引くことです。

glace/déjeuner/métal/permètre/enfin/mesure/piste/dehors/défaut/vague

(4) 下線を引いた語は名詞ではありませんが、名詞として使われる可能性があります。下の例を参照に名詞としての文を作成しなさい。

(例) un manteau bleu → Le bleu te va bien/Ce bleu te va bien.

a. Une personne coupable

b. Il faut aller à Paris.

c. Un enfant bavard

d. Un homme menteur

【15節】 Le genre des noms (名詞の性)

「名詞の性」を扱っている。

○普通名詞には性があり、男性名詞か女性名詞です。男性名詞には限定詞「le, un, ce…」が付加され、女性名詞には「la, une, ma…」が付きます。

○フランス語の名詞は性が決まっています。会話をする中で名詞の性を学んでいますね。名詞の「table」について言えば、「table」だけで覚えず、「la table, une table, cette table」というまとまりで覚えるでしょう。あまり使われない名詞の性がわからない場合には辞書を引きましょう。

○生物には雌雄がありますから、その名詞の性はそれに対応する場合があります。が、そうではないこともあります。「boucher」という名詞は、「le boucher」では肉を売る男性名詞を指し、「la bouchère」では肉を売る女性

名詞を指すのです。

○次の語は男性名詞ですが、それに対応する女性名詞は何ですか。

épicier/instituteur/chanteur/gardien/champion/
apprenti

上の例では、男性と女性の対応がうまくいきましたが、そんなことは多くありません。下の例は対応しない場合です。

la marine/le marin, la médecine/le médecin, la
capucine/le capucin

○練習

(1) 同音異義語は性によって区別されます。
次の2つの違いを説明しなさい。

Un moule/une moule, un tour/une tour, un vase/la
vase, le poste/la poste, un livre/une livre

(2) なぜ次のように言わなければならないの
ですか。

Madame le ministre, Madame le juge, Madame le
professeur

【16節】 Le nombre des noms (名詞の数)

名詞の数をとり上げている。

○名詞は単数形か複数形かです。Un lapinが
単数形でゼロ語尾です。複数形はlapinsで-s
を持っています。話しことばでは音として現
れません。名詞によって複数形は異なります。

○限定詞は性だけでなく数も示します。「le
manteau, des manteaux, certains manteaux」。
また、「une veste, mes vestes, quelles vestes」
と書けます。

【17節】 Les déterminants du nom: recapitulation
(名詞の修飾語：限定詞)

限定詞を学ぶ。

○限定詞には冠詞 (une, les), 所有代名詞
(sa, votre), 指示代名詞 (ce, ces), 数詞 (deux,
vingt), 不定代名詞 (chaque, aucune) があ
ります。

【18節】 Le GN complété par l'adjectif (形容詞
による名詞修飾)

形容詞によるGN (名詞グループ) 修飾を学ぶ。

○「Paul était un petit bonhomme.」という文
で、「petit」を消せば「bonhomme」となって
正確さに欠けます。「petit」のような語は形
容詞という新しい品詞です。形容詞は名詞の
左または右に位置して名詞を修飾します。名
詞と性・数で一致します。

○これまで、GN=D+N (le cheval) だけで
したが、2つ目として、GN=D+N+adj. (un
vélo neuf) が加わりました。

○練習

(1) 次の点線部に形容詞を書き加えなさい。
どんな意味になりますか。

a. L'hiver n'est pas une saison.....dans nos pays.

b. La classe est au complet; il n'y a aucun élève
.....

c. On ne mange pas de pommes de terre.....

(2) 例にならって2つの文を結合しなさい。
(例) Voici un livre. Il est intéressant. → Voici
un livre intéressant.

d. Ceci est un jeu. Il est dangereux.

e. On a traversé une zone de brouillard. Il était
épais.

【19節】 L'accord de l'adjectif en genre et en
nombre (性・数による形容詞の一致)

形容詞の一致を学ぶ。

○形容詞自身は性を持たず、修飾する名詞の
性に従います。

○「rapide」のように性による区別のない形
容詞もあります。「clair」と「claire」のよ
うに性の区別は「-e」の有無によりますが、発
音上は区別がありません。

○数の区別は「-s」の有無によります。「épais」
のような形容詞は単複同形です。また、単：
複=égal : égauxのようなものもあります。

○練習

(1) 不規則な形容詞があります。次の形容詞
の複数形を書きなさい。

Un vieux monsieur → une.....dame

Un rythme fou → une vitesse.....

(2) 「long」「public」という形容詞の女性形は何ですか。

【20節】 Un autre complément: le GN prépositionnel (他の修飾: 前置詞句による名詞修飾)

前置詞句による名詞修飾を学ぶ。

○「la table」「la cuisine」はともにGNです。「la table de la cuisine」もGNです。新しいタイプです。「de la cuisine」は「ronde」(la table ronde)と同じ働きをします。呼び名をGN prépositionnelとします。

○練習

(1) 次の中でGN prépositionnelを囲みなさい。

a. Vendredi préparait une boule d'argile.

b. Le feu a éclaté dans la salle des malades.

(2) 「le voyage présidentiel」は「le voyage du président」から得られます。次の形容詞をGN prépositionnelに変えなさい。

c. la déclaration ministérielle

d. une maladie cardiaque

(3) 次の2つはどう違いますか。

e. 「une nuit de fête」と「une fête de nuit」

f. 「une voiture de course」と「une course de voitures」

【21節】 Un autre complément du nom: la relative (他の修飾: 関係節による名詞修飾)

関係節による名詞修飾を扱っている。

○ des objets/sans utilité/que je ramassais/qui ne peuvent servir à rien

「des objets」が、/の右側の要素によって修飾されています。2番目と3番目が今回導入されます。「que」「qui」を関係代名詞といい、それ以後の部分に関係節 (propositions subordonnées relatives) といいます。「qui」を用いた場合は関係節中の動詞が被修飾名詞の性・数と一致します。「que」では一致は起

こりません。

○練習

(1) 「il, elle」で置き換わるGNを囲みなさい。

a. La personne qui a trouvé un porte-monnaie doit le rapporter.

b. Le bus que nous prenez d'habitude aura du retard.

IV. Le groupe verbal

【22節】 Verbe et groupe verbal (動詞と動詞グループ)

「動詞と動詞グループ」を分析する。

○GNがいつも主語として使われるわけではありません。「Pierre regarde le chien de mon voisin.」のようにも使われます。つまり、文中の多くの場所に現れるのです。

○「動詞グループ」というのは、「Pierre regarde Dick.」→「Pierre le regarde.」のように代名詞化 (pronominalisation) できるもの+動詞を指します。

○練習

(1) 次の2文のうち、1つはGNが動詞グループのメンバーで、もう1つはメンバーではありません。例にならって2文の違いを明らかにしてください (○=正, ×=誤)。

(例) a. Le menuisier travaille le bois.

→ ○Le menuisier le travaille.

b. Le menuisier travaille la nuit.

→ ×Le menuisier la travaille.

c. Je mange tous les bonbons.

d. Je mange tous les jours.

e. Le malade a attendu le médecin.

f. Le malade a attendu une heure.

【23節】 Construction directe et construction indirecte (直接目的語と間接目的語)

直接目的補語と間接目的補語を取り上げている。

○動詞の直後のGNが以下のような代名詞化ができれば、それは直接目的補語です。

(例) Je regarde le chien. → Je le regarde.

Je regarde les joueurs. → Je les regarde.

Je regarde des fruits. → J'en regarde.

○一方、次のような構文を考えてみましょう。

Le bébé sourit à sa mère.

Jean parle de ses dernières vacances.

Mama est allée à Paris.

ここで、sa mère, ses dernières vacances, ParisはGV（動詞グループ）の一部であり、以下のような代名詞化が可能です。

Le bébé lui sourit.

Jean en parle.

Maman y est allée.

注目したいのは、GVの一部ですが、動詞の直後にàやdeを伴っていることです。このため、このような構文を間接（目的）構文と呼んでいます。

○deを用いた次の2つの文を見てください。

Je parle de mes amis → Je parle d'eux.

Je parle de mes vacances. → J'en parle.

代名詞化が異なっていることに気がきます。これはGNの性質が異なっているからです。amisは有生で、vacancesは無生の名詞です。そのために異なる代名詞化を行うのです。これが、代名詞が動詞の後に置かれる唯一の場合です。

○練習

(1) 次の直接目的補語を代名詞化しなさい。

a. Pierre regarde la course.

b. Pierre fait des photos.

(2) 次の間接構文を代名詞化しなさい。

c. Pierre parle à son frère.

d. Pierre parle de son copain.

e. Pierre discute de ses projets.

【24節】Le groupe verbal à deux compléments（2つの補語を持つ動詞群）

2つの補語を持つGVがテーマである。

○次の文は2つの補語を持っています。

Paul donne le ballon à son frère.

GVを定式化すると次のように書けます。

Donner quelque chose à quelqu'un = V + GN + GN prép.

「donner」は直接目的補語と間接目的補語を持ち、それらとともにGVを構成しています。代名詞化により次の文が得られます。

Paul le lui donne.

○「donner」のような動詞では、間接目的補語が消去されることがあります。

Le maître distribue les livres.

○練習

(1) 次の文で使われている代名詞を元の名詞に復元しなさい。

a. Il le lui donne.

b. On les leur donne.

c. Elle lui en donne un

d. On leur en donne plusieurs.

【25節】Le groupe verbal réduit au verb（自動詞文）

GVが動詞1個で成り立つことを扱う。

○以前の課で、もっとも短い平叙文は次の文であることを学びました。

Il dort

「dort」のような動詞は、単独でGVになれます。動詞の右側にGNがあっても、それは代名詞化されません（× = 誤）。

Paul dort la nuit. → × Paul la dort.

ただし、「La nuit, Paul dort.」と言うことはできます。

○練習

(1) 次の動詞を「manger (quelque chose) 型」と「dormir」型に分類しなさい。

entourner – naviguer – nettoyer – naître – pousser – maigrir – trotter – ramper – boire

(2) 次の2つの文を比較して、何がわかりま

すか。

L'oiseau vole. La pie vole des objets.

(3) 次の2つの文はどう違いますか。

Je contemple la nuit. Je dors la nuit.

【26節】 Les pronoms compléments essentiels des 1re et 2e personnes（代名詞化）

一人称と二人称の代名詞化を確認する。

○三人称の名詞グループが目的補語の場合、代名詞化は次のようになります。

Je mange un bonbon. → Je le mange.

Je parle à mon frère. → Je lui parle.

では、目的補語が一人称や二人称の場合はどうでしょうか。

voir quelqu'un → Il me/te/nous/vous voit.

parler à quelqu'un → Il me/te/nous/vous parle.

直接目的補語と間接目的補語は同形であることがわかります。

○練習

(1) 次の2つの文の違いを説明しなさい。

a. Il me cache. Il me cache la vérité.

b. Il me choisit. Il me choisit un cadeau.

【27節】 Le groupe verbal avec être

être動詞を用いたGVを扱う。動詞êtreと助動詞êtreの区別。

○動詞êtreは消去できません。「Je suis malade.」や「Nous sommes ici.」で確かめてください。Êtreに続く語は不可欠です。その語は代名詞化が可能です。

Je suis malade. → Je le suis.

Nous sommes ici. → Nous y sommes.

代名詞「le」に変えられる語を属詞（attribut du sujet）といいます。

Elle sera institutrice. → Elle le sera.

Tu es en colère. → Tu l'es.

このような「le」は性も数も表しません。直接目的補語に代わる「le, la, les」とは異なります。

○次の2つの文では代名詞化が違います。な

ぜでしょうか。

Le lion est carnivore. → Le lion l'est.

Le lion est un carnivore. → Le lion en est un.

冠詞の有無で代名詞化が変わります。第1文はライオンの属性を主張しています。第2文では、ライオンが「食肉目」に所属する動物であることを表しているのです。

○練習

(1) 代名詞化しなさい。

a. Les valises sont dans le coffre de la voiture.

b. Je serai au rendez-vous.

(2) 動詞êtreと助動詞êtreを判別しなさい。

c. Je suis sorti.

d. Elle est fatiguée.

(3) 一致（accords）に注意しなさい。

（例）Vous semblez fatigué. ← 親しくない一人の男性に向けられた文。

e. Vous semblez fatigués.

f. Tu sembles fatiguée.

【28節】 Le GV avec une complétive

queに続く補足節を扱う。

○次の2つの文を比べてみましょう。

Pierre annonce son départ.

Pierre annonce qu'il n'ira pas au cinéma.

「que」に導かれた「il n'ira pas au cinéma」という文はGVの内部にあります。目的補語従属節（proposition subordonnée complément d'objet）といいます。それは必須補語として働くのです。単に補足節といっていいいでしょう。

○「Je pense que……」, 「Je suis sûr que……」, 「Pierre dit que……」等で始まる文にも続きます。

○ある種の動詞に導かれる補足節では接続法が使われます。

Je constate que vous n'êtes pas venu.（直説法）

Je regrette que vous ne soyez pas venu.（接続法）

○練習

a～dの補足節を、下記のGNに置き換えなさい。

GN : la fin des embouteillages – l'heure de son arrivée – son ignorance – son départ

- a. Il a annoncé qu'il partait.
- b. Il a téléphoné qu'il arrivait à 11 heures.
- c. Il a avoué qu'il ne le savait pas.
- d. La gendarmerie signale que les embouteillages sont finis.

V. Les groupes facultatifs et les

<circonstances>

【29節】 Groupes obligatoires, groupes facultatifs

文成立の必須グループ, 任意グループ。

○次の文で「le soir」は代名詞化はできません。文頭への移動はできます。

Paul travaille le soir.

「le soir」は文の成立に不可欠ではありません。会話参加者に必要な情報を提供する働きをします。そのような要素を任意グループといいます。文の中に1つ以上の任意グループが使われています。その形態は, GN, GN prép, 節, 副詞の4種類あります

Le soir, Paul travaille.

Paul travaille pendant la matinée.

Paul travaille quand la maison est calme.

Paul travaille tard.

「tard」のような副詞を文頭へ移動するのは変です。

○「quand」をはじめ「parce que」, 「si」, 「pour que」のような表現を従位接続詞といいます。従属節はこれらの従位接続詞の後に続きます。

【30節～33節】 Les groupes facultatifs liés à l'idée de temps/lieu/manière/cause/but

時間・場所・様態・理由・目的を示す任意グループ。

○時間を表す任意グループ

- (1) GN, (2) GN prép, (3) 副詞, (4) 非人称構文, (5) 従属節, (6) en + 現在分詞

(4) の例 : Il y a trois ans

(5) の例 : En arrivant

○場所を表す任意グループ

(6) GN prép (例 : Sous la table), (7) 副詞 (例 : Ailleurs)

○様態を表す任意グループ

de manière brutale → brutalement, de manière admirable → admirablement

上のように-mentを付加すればいいものと, 次のような形態変化を起こすものがあります。

de manière bruyante → bruyamment

「méchant」のように形容詞・名詞・副詞で不規則な変化を見せる語もあります

de manière méchante → méchamment (副詞)

→ méchanceté (名詞)

○理由・目的を表す任意グループ

理由を表す2つのパターンがあります。

A cause du mauvais temps, la récolte sera mauvaise. (雨のため収穫は悪そうだ。)

Parce qu'il a fait mauvais temps, la récolte sera mauvaise.

目的を表すにも2つのパターンがあります。

Je finis mon travail ce soir pour être libre demain. (明日の時間を作るため今晚勉強する。)

Je finis mon travail afin que ma journée de demain soit libre.

どちらの場合にも, 前置詞句 (GN prép) が従属節を用います。

理由 (cause) または目的 (but) を明示する次のような表現法もあります。

La récolte sera mauvaise : la cause en est le mauvais temps.

Je finis mon travail ce soir dans le but de libérer ma journée de demain.

○練習

- (1) 次のそれぞれの2つの文では, はっきりと理由を示していません。2番目の文が1番目の文の任意グループになるように

書き直しなさい。

- a. Il n'est pas venu. Il était malade.
 b. Je me suis fait gronder. J'avais fait des sottises.
 c. J'ai sommeil. Je me suis couché trop tard.
 d. Je connais la fin de l'histoire. J'ai déjà vu le film.
 (2) 文の意味を変えないで「parce que」を「à cause de」に置き換えなさい。
 e. Nous n'avons pas pu sortir parce qu'il faisait trop froid.
 f. Je ne vais pas jouer dans la rue parce que c'est dangereux.
 (3) 時間か場所か理由を表す情報を任意グループとして次の文に付け加えなさい。
 g. Dans certains quartiers, la police barre les rues.
 h. Ce matin, deux nouveaux avis ont été affichés.

【34節】 Phrases ou propositions? (文か節か)
 これまでの復習。

【35節】 La coordination (等位接続)

- 「GN et GN」, 「adj. et adj.」, 「GV et GV」,
 「phrase (節) et phrase (節)」
 ○ 等位接続に用いる接続詞は「et」のほかに,
 「ou」「mais」「ni」「or」があります。

VI. La conjugaison des verbes

○ 主語名詞の「il」「ils」に対応する動詞の綴り字と発音に注意してください。

【母音交替】 il a / ils ont, il est / ils sont, il fait / ils font, il va / ils vont, 等。

【子音出現】 il dit / ils disent [diz], il part / ils partent [part], il boit / ils boivent [bwav]

(以下, présent (現在), imparfait (半過去), passé-composé (複合過去), futur (未来), conditionnel (条件), passé simple (単純過去), subjonctif présent (接続法現在), impératif (命令法) と続くが, 略)

3. 分析

言語記述の方法と視点, 国語教科書としての意義に分けて分析を行う。

3.1. 言語記述の方法

以上の説明の基礎になるのがチョムスキーの初期理論である。チョムスキー (2015) の第4章「句構造」には次のような言語記述の「単純な」(チョムスキー 2015: 33) 定式が記されている。

NP → T + N

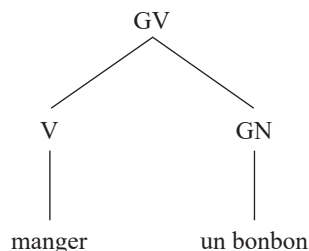
VP → Verb + NP

T → the

N → man, ball, etc.

Verb → hit, took, etc.

本書はこの定式を根幹として叙述が展開されている。72ページには次のような樹形図が載せられている。



3.2. 言語記述の視点

(1) 発音と綴り

語や文の音声表現を文字に写す作業に重点を置いている。本書の巻末に「国際音声字母IPAとフランス語の綴り」の対応表が掲載されている (p.125)。母音 [e] という音は綴り /é/, /er/, /ez/, /ai/ に対応し, 「dé」, 「jouer」, 「jouez」, 「je ferai」のような語に使われている。[e] はまれに /e/, /æ/, /et/ という綴りに対応し, 「piédestal」, 「œdème」, 「et」として書き表されていると説明している。蓮實 (1986) の「小学校に入ればフランスの子供たちも字をならう。だが, それは, しかるべ

き字のつらなりがしかるべく発音されるという順序ではなく、しかるべき音はしかるべく綴られるという事実を彼らはそこで習得するのであり、その点で、この字はこう読むと教えられる日本人の場合とは順序が逆だということであろう」という発言は上の事実を裏付けている。

(2) 話すことと書くこと

3節～5節で話すという言語行動と書くという言語行動を比較した後、6節以降で話しことばと書きことばの違いに留意させている。書きことばを意識させることで児童の言語生活を豊かにしていこうとする意図がうかがえる。宮脇(2021)は中国語の文章語の歩みに触れて次のように述べている。

話し言葉を文字に写すことで書き言葉がつけられるのではない。書き言葉を学ぶことで話し言葉がととのえられていくのである。一般に、人間は文字を通して学ばなければ、言葉を豊かにはできない。(p.36)

(3) 文の成り立ちの基本

7節と8節で、長い文が簡単な文と構造的に等しいことを理解させている。1個の名詞グループと1個の動詞グループがあれば文が成り立つことを、さまざまな例を用いて伝えている。23節では、動詞の直後の名詞グループを分類し、*preposition*を伴わないものを直接補語、*à* や *de* を伴うものを間接補語とし、その代名詞化が異なることを示している。24節では2つの補語を持つ動詞を取り上げている。25節では、主語名詞(GNS)+Vという文も存在していることを伝えている。他動詞・自動詞という考え方をいわず、補語の有無と補語の数によって分類することは、わかりにくさを避けて児童の理解を優先させた方

式ではないだろうか。

(4) 主語の認定

8節では、「主語名詞は数(単数・複数)の上から動詞の形を変えます。主語名詞が複数なら動詞も複数形になります」と明快な主語認定法を述べている。主語名詞の歴史的経緯に関して家島・川村・田島(1962)は次のように述べている。

ラテン語では、主語を強調する場合のほかに主語人称代名詞は使わず、フランス語で *j'aime* と2語にわけてあらわすところを、*amo* という1語で総合的にあらわしました。<私>の行為であることは、-oという語尾で十分に示されたのです。……。古代フランス語はどうかというと、現代語とちがって、原則は主語人称代名詞を用いなかったが、動詞の人称語尾退化などの理由から、しだいに主語人称代名詞を使いはじめました。(家島・川村・田島1962:34-35)

このような経緯によって、主語名詞と動詞の連辞関係が成立したと言えるだろう。

(5) 必須グループと任意グループ

文の成り立ちの根幹は、チョムスキーのいう「Sentence → NP + VP」である。談話であれ文章であれ、根幹だけで聞き手・読み手に十分な情報を伝えることはできない。根幹部+余剰部(根幹部にとって)が必要な内容の構成となる。余剰部には、時や場所、理由や目的などが含まれる。これが任意グループと呼ばれる。29節～33節がこれを扱っている。

(6) 代名詞化

日本語に慣れた目にフランス語の代名詞は厄介である。既出の名詞(グループ)に代えてどの代名詞を使えばいいか (*le/la/les, en,*

y等), その代名詞を文中のどこに移動させればよいか, 悩むこと甚だしい。(例) Paul donne le ballon à son frère. (本書p.74) → Paul le lui donne. ここで, le = le ballon, lui = son frèreなのであるが, 「Paul lui le donne.」は許されない。「avoir + 過去分詞」, 「être + 代名動詞の過去分詞」ではさらに複雑になる。

このような代名詞であるが, 代名詞化 (pronominalisation) はフランス語文法を分析する鍵の一つであることを明らかにしている。22節で「le menuisier travaille le bois.」と「Le menuisier travaille la nuit.」を比較し, 前者の「le bois」は代名詞化できるが, 後者の「la nuit」は出来ないと述べている。2文が表面上は類似していても文法構造は異なっていることを示している。これもチョムスキーの学説に負うところが大きいと思われる。

(7) 語順と意味

語順が変われば意味が変わる。「Paul aime Marie.」と「Marie aime Paul.」は異なる意味を表す。当然のことながらその重要性は強調しておく必要がある。20節に語順に着目した練習がある。「une nuit de fête」と「une fête de nuit」の意味の違いを問うている。

(8) 近似した意味を持つ2つのGNや文

20節では「le voyage du président」と「le voyage présidentiel」の近似性を示した後, 「une maladie cardiaque」をGN prépositionnelに変えるよう指示されている。28節では, 「Il a avoué qu'il ne le savait pas.」を「Il a avoué son ignorance.」に変えるよう指示されている。また, 33節では「A cause du mauvais temps, la récolte sera mauvaise.」と「Parce qu'il a fait mauvais temps, la récolte sera mauvaise.」の近似性を取り上げている。さらに, 代名詞「en」を用いて2文に分離する方法も示されてい

る。「La récolte sera mauvaise: la cause en est le mauvais temps.」(収穫はよくなかろう。その理由は天候不順だからだ。)という, 近似性を保持する3番目の例である。ここでも, 2番目の話しことば特有の表現法から3番目の書きことば特有の表現法への橋渡しが行われている¹⁾。

3.3. 児童を指導する観点

(9) 「自明」のことは自明ではない

わかりきったことを言い表さない/書き表さない文化がある一方, 自明のことを自明ではないとして, 前提部分から話を進める文化がある。フランスは後者の文化のようである。例えば, 1節の母語の定義, 2節のフランス語を話せるということの定義, 5節の「書く時には紙の前で一人です」という, 至極当然な事象の記述, 7節の「文章は句点で文に切り離されます。文は大文字で始まります。また, 文は同じ長さではない……。」という, 文論・文章論の第一歩の説明など, 書き言葉に取り組もうとする児童に対し, 「こんなことわかっているだろう」と端折ることなく丁寧に順を追って話を進めている。

このような姿勢を筆者は伝承と共有の観点から評価する。成人と未成年の間には大きな隔りがある。隔りを埋める仕事は成人が担うものである。山登りを教えるように, 料理を教えるように, 礼儀作法を教えるように, 成人にとって自明のことを未成年に, 時には手に手を取って, 時には言い含めるように伝えていかななくてはならない。ことばも同様である。成人と知識や技術を共有していくことで未成年は成人になっていくのである。渡邊 (2020) のいう「思考と表現の錬磨」を通して, 山崎 (2022) のいう「言語資本」の

1) E. Legrand (1935). *Méthode de Stylistique Française* への接続を意識した説明だと考える。

獲得に繋がっていくのではないだろうか。

振り返って日本ではどうだろうか。「以心伝心」と心で通じ合うことを尊び、「言わぬが花」と沈黙の美学を称える。前提を押し隠そうとする。その結果、日本語をめぐっては通じ合えないことが目に付く。一つの文を指して「文章」と言う。文と文章の区別ができていない。この点に関して1節で言及した渡邊(2020)を再掲する。「紙に書いた一つの文を単語ごとにはさみで切り離し、それぞれの語の文法的機能をその名称とともに学ぶ。……。次に一度ばらばらにした語を再び文章にして、今度はある構造の中で各部分がどのような役割を果たすのかを確認する」。おかしいと思わないだろうか。「一つの文を…切り離し、次にばらばらにした語を再び文章にする」という道筋では文→文章と変じてしまっている。無自覚に用語を用いた結果である。

また、「文節」と「分節」の違いがわからない人がいる。「語(mot)」と「語彙(vocabulaire)」を使い分けず、「日本語学習者の知らない語彙を指導する」と日本語教師が口にする。日本語を説明するために必要な概念を定義して、それを児童に提示するという手続きを怠ってきた結果なのではないだろうか。

(10) 「練習」を通して児童の気づきを促進

1節で取り上げたように、森(1978)は「教える事実や規則を無数の事例に照らして説明し、たくさんの応用問題をやらせて、その知識を確実にするのである」と述べている。「たくさんの応用問題」を本書で確認する。本書7節に6個、7節に8個、8節に6個、9節に4個、10節に6個、11節に5個…と続いていく。「～個」というのは大問の数で、一つの大問にはたいてい4つの小問が付いてい

る。これら「たくさん」の練習によって、導入された事項の強化を行い、ことばとその構造を児童に気付かせている。動詞の活用に関する練習を取り上げよう(p.122)。

目標：直説法現在と接続法現在の違いに気付かせること

使う構文：C'est vrai que…(…のは本当だ)とIl est possible que…(…かもしれない)

従属節内で使う動詞：avoir, aller, donner, faire, prendre, savoir, dire

従属節内で使う主語人称：適当に

(例1) <être>

C'est vrai qu'il est malade. (estは直説法)

Il est possible qu'il soit malade. (soitは接続法)

(例2) <voir>

C'est vrai qu'on voit la Méditerranée du haut de certaines montagnes.

Il est possible qu'on voie la Méditerranée du haut de certaines montagnes.

問題：<avoir><aller><donner>

<faire><prendre><savoir><dire>

「être」では、直説法：接続法=est [e] : soit [swa] と音も綴りも異なる。「voir」では直説法：接続法=voit [vwa] : voie [vwa] と、音は同じだが綴りが異なる。こうした言語的事実を練習によって気づかせ、その定着を目指すのである。

4. おわりに

森有正に導かれてフランス初等学校5年生向けの文法教科書を概観し、考察した。概観したといっても、必要と思う部分を翻訳しただけである。それでも、自国のことばを客観的に把握することの重要性を確認することができた。

今回のささやかな研究で知りえたことの一つに、フランスの国語教科書が日本語に翻訳されていないことがある。ネット検索を何回

か試みたが、外国語としてのフランス語教育関連書は多くあるものの、フランスの児童を対象とした国語教科書の翻訳書を探し出すことができなかった。1節で取り上げた渡邊（2020）や山崎（2022）などの解説書では教科書の具体的な内容にたどり着くことができない。本研究に多少の意義があるとすればその点であろう。

今後の課題は、フランス中等学校における文体教育の一端を明らかにすることである。そのためにE. Legrandの文体教科書を取り上げる予定である。

参考文献

- 清水幾太郎（1959）『論文の書き方』、岩波書店。
- チョムスキー（2015）『統辞構造論付『言語理論の論理構造』序論』、福井直樹・辻子美保子訳、岩波文庫青695-1、岩波書店。原著は、Chomsky（1957）. *Syntactic Structures*. Mouton & Co., B.V., Publishers, The Hague.である。
- 蓮實重彦（1986）『反＝日本語論』、ちくま文庫490、筑摩書房。原著は1977年。筑摩書房。
- 藤原雅憲（2022）「Arimasa MORI: *Leçon de Japonais* 日本語教科書の検討－正しい解釈のために－」、『金城学院大学論集人文科学編』第18巻第2号、金城学院大学。
- 藤原雅憲（2023近刊）「フランスの中等学校における文体教育－E. Legrand: *Méthode de Stylistique Française*の概要とその分析－」、『金城学院大学論集人文科学編』第19巻第2号、金城学院大学。
- 宮脇淳子（2021）「岡田英弘の漢字論」、『漢字とは何か－日本とモンゴルから見る』序章、藤原書店、p.36。
- 森有正（1978a）『森有正全集2』、筑摩書房。
- 森有正（1978b）『森有正全集4』、筑摩書房。
- Mori, Arimasa（1972）. *Leçon de Japonais* 日本語教科書、大修館書店。
- 家島光一郎・川村克己・田島宏（1962）『現代フランス語のできるまで－フランス語小史－』、白水社、第3刷1971年。
- 山崎昌子（2022）『現代フランスのエリート形成－言語資本と階層移動－』、青弓社。
- Lagrand, E.（1935）, *Méthode de Stylistique Française*. J. DE. GIGORD.
- 渡邊雅子（2020）「思考と表現を錬磨するフランス語の「書く」教育－ディセルタシオン（フランス式小論文）に向けた段階的教育法－」、細尾萌子・夏目達也・大場淳編（2020）『フランスのバカロレアにみる論述型大学入試に向けた思考力・表現力の養成』、ミネルヴァ書房、pp.91-110。